

小池辰雄著『無者キリスト』を読む

## 第一部 キリストの実存十転 第六転「十字架(ゴルゴタ)」

2024年3月31日 (東京 新宿)

弘野慶次郎

第六転 十字架(ゴルゴタ) このイエスをはりつけにした十字架 多くの人は法律的犯罪者ではない 一方の悪人はイエスを罵って 私が死んだら十字架の木の柱を立てて

### ● 第六転 十字架(ゴルゴタ)

おはようございます。

「主が血を流したことによって私は生きた」

というようなことが、この讚美歌(332番「主はいのちを与えませり」)を作った人の告白でもあったのだろうと、私は思います。いろんなことが人生にはありますので、何があっても、この主キリストの恵みは、本当に喜んで生きて行ける、そのような人にしてもらったのが、今日学ぶところの「十字架」というところです。

小池辰雄というのは、この新宿集会を作られた基の人ですから、その小池辰雄の受けられた信仰そのものをもう一度、一から学び直したいというのが私の思いなんです。何回読んでも聖書と同じで、昨日読んだ時と今日読んだ時とでも、また新しい思いをいただきますね。それほど豊かなものが聖書にはあります。小池辰雄の本にもそういうところが見られるので、何回読んでもそこから学ぶものが多いと私は思っています。

今日は「十字架(ゴルゴタ)」という所、112ページなんですけれども、ここをずうつと読んでいくと、小池個人の思いが吐露されている所があつて、普通の聖書を解説している本には個人があまり出てこない。ところが、小池辰雄のこの本には、個人の思いがずつと出てきて——私たちが証言をしたりしますでしょ、あれと同じような形で——これは小池辰雄の証言集みたいなものですね。思いがずつと溢れて出ている。一応、体裁はいろいろとなっていますけれども、今日学ぶところの「十字架(ゴルゴタ)」という所も、小池辰雄が本当に十字架を受けとった歓びみたいなものが吐露されている所です。

《第六転 十字架(ゴルゴタ)》

民の長老たち、祭司長たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、ローマの官憲・兵卒などに敵視され、弟子どもに知らん顔をされ、弟子の長ヘテロにすら否まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、雷同的な民衆に棄てられ、政治犯、瀆神者ときめつけられ、極悪人と同列に置かれ、悪口雑言を浴びせられ、唾きせられ、鞭打たれ、荊の冠をか



ぶせられ、血の雫と汗にまみれ、傷だらけの軀にされ、侮辱の極みの中を七十キロもある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ、髑髏の丘へと、ヴィア・ドロロサ「苦難の道」をよろめき辿りゆくイエス！

人間の、人類の、世界の、どうにもならぬ不信の、忘恩の、反逆の悪魔的、地獄的、闘争的、擾乱の実相の逆徴が、イエスの十字架を負うこの姿に逆写しされている。

十字架を負うイエスの他になお二人の悪人が死罪の故に各々十字架を負い、曳かれて行った。クレネ人シモンがイエスの十字架の一端を荷ってくれた。ゴルゴタにやつと到りつく。蒼白、凄惨、惨憺たる姿のイエス。だが、彼の胸の中を誰れが知る。やがて彼はぶつ倒され、「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」なる罪標のつけられた十字架に釘づけにされた。若き血潮が噴流する。イエスは今正に人生の真昼どき、三十路を過ぎたばかりである。》

最初の一行目から、

「……髑髏の丘へと、ヴィア・ドロロサ「苦難の道」をよろめき辿りゆくイエス！」

と、ここまで文章が一つなんです。これは長い文章ですけれども、聖書に書いてある十字架の記事をここで簡潔にまとめてくれている。

「民の長老たち、祭司長たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派」

という人は、私たちは詳しく知りませんよ、どういうことをやっていたか。知らないけれども、要するにその当時の知識階級みたいな人たちでしょ。そういう知識階級の人たちと、それから

「ローマの官憲・兵卒などに敵視され、」

これはローマの支配下にありましたから。

「弟子どもに知らん顔をされ、」

弟子どもとは、我々と一緒ですよ。

「弟子の長。ペテロにすら舌まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、」

ペテロは三回「知らん」と言いました。ユダという人は、イエスを選んだ人ですけども、「鬼才」と書いてある。頭が良かったのでしょうね。

「雷同的な民衆に棄てられ、」

民衆です。全部これは、全世界の人間ですよ。知識階級の人も、敵のローマ兵も、弟子どもも、民衆も、要するにみんながキリストを否んだということです。何もペテロだけが否んだのではない。みんなが否んだということです。

そして、「罪標」が書かれるけれども、

「政治犯、瀆神者ときめつけられ、」

神を本当にボロクソに否定して神に逆らっているという汚名をきさせられ、政治犯とか言われて、



「極悪人と同列に置かれ、」

これは「極悪人と同列」ですよ。十字架にかけられるというのは本当に極悪人です。「十字架に懸けられている」ということ自体が、もう近づきたくないですよ。私たちはやはり、殺人犯が死刑になるとかいう、そういう人たちに接したくないでしょ。それと同じくらいに極悪人にされているということは、これは大変な罪人なんですよ。そういうふうに見られていたわけですよ。そういう人の味方になるということは、なかなか出来ないことですよ。ペテロが二度も否んだというのも当然のことだと思えます、凄惨な罪人だから、

「悪口雑言を浴びせられ、唾きせられ、鞭打たれ、荊の冠をかぶせられ、血の雫と汗にまみれ、傷だらけの軀にされ、」

これは本当にゴロゴロの雑巾みたいなものですよ。

「侮辱の極みの中を七十キロもある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ、髑髏の丘へと、ヴィア・ドロロサ「苦難の道」をよるめき辿りゆくイエス！」

「髑髏の丘」とは髑髏の丘ということですよ。そこには死刑囚が何回もここで十字架にかけられたと思う。だからひよつとしたら、髑髏がゴロゴロしているような、人の骨がゴロゴロしているような所ではなかったかなと私は推測するんです。こういう「髑髏の丘」という名前が付いているということは、やはりあまりきれいな所ではなかったでしょうね。刑場という所ですから、死刑にされた人の骨が棄てられていただろう。イエスはちゃんと葬られましたよ。弟子たちによって葬られたけれども、普通の罪人なんかは引き取る人もないから、その辺に放っておかれたのではないかなと私は思う。だから、「髑髏の丘」というのは具体的には何か臭いもするような汚い苦しい所ではなかったかなと思う。寄りつきたくないような所であったと思う。そういう所に十字架を背負ってイエスが行かれたということとを、この6行くらいで小池辰雄がまことめて書いてくれている。その次の所に、

「人間の、人類の、世界の、」

と書いている。人間一人びとりではないんですよ。人類そのもの、歴史そのもの、世界そのもの。もう人類が、すべての人、例外なしにすべての人ということですよ。全体の人類ということを書いてある。個々の人も含まれる。そういう、

「どうにもならぬ不信の、」

と書いてあるでしょ。この「どうにもならぬ」という言葉は、次の「忘恩、反逆、悪魔的、地獄的、闘争的、擾乱的」という所に全部かかっています。「どうにもならない不信、どうにもならない忘恩、どうにもならない反逆の悪魔的、どうにもならない地獄的、どうにもならない闘争的、どうにもならない擾乱の実相の逆徴」と、書いてるでしょ。これが真実の姿ですよと言っている。人間の姿は本当にこういうものではない、その姿が本当の姿で、人間の姿というのはそういうものですよ、それが実相ですよと、書いてくれている。その実相の逆超が、



「忘恩の、反逆の悪魔的、地獄的、闘争的、擾乱的実相の逆徴が、イエスの十字架を負うこの姿に逆写さかうつしされている。」

と。十字架の姿の中に我々人類の本当にどうしようもない罪みたいなものが、イエスの姿に写されているよ、と言っているわけです。十字架というのは、神さまから罰を受けている我々のために代わりにしてくださいということだから、その我々のどうしようもない罪というのが、その実相がイエスの中に写っていますよ、ということをお池辰雄が言ってくれている。どうにもならない人間の罪の実相が、イエスの中に表れているんですよ、ということをお池辰雄がここで2行に渡って簡潔に書いてくれている。

そして、クレネ人シモンがイエスの十字架の一端を荷って助けてくれた。もう本当に力尽きてどうしようもない。イエスは、その十字架に付けられる三日ほど前から飲み食いもしていない。二日間か三日間、捕えられて穴の中に入れられたということを聞いたことがあるけれども。そういう所で、水もおそらくその二日間、飲むことも食べることもできなかった。だから、ヨレヨレになっておられたのではないかなと思う。それで、ゴルゴタにやつとたどり着くでしょ。

「ゴルゴタにやつと到りつく。蒼白、凄惨、惨憺たる姿のイエス。」

本当にボロボロだったんですよ、十字架にかかる前までも。食べていない、飲んでいないのだから。二日間、食べていないだけでも、もうヨレヨレになりますから、そういう本当に惨憺たるものだった。その前に鞭打たれていますよね。「蒼白、凄惨、惨憺たる姿のイエス」、それは人間としてはとんでもないところに来た。

「だが、彼の胸の中を誰れが知る。」

誰もわからないですよ。本当に罪人になって曳かれていくわけですから、極悪人として曳かれていくわけですから。その前に居る人も、彼の心の中なんて全然わからない。我々だって、イエスの心の中、イエスの思いなんて全然わからないですよ。この時だって誰もわからなかったよ、ということをお池辰雄は書いている。

「やがて彼はぶつ倒され、「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」なる罪標すてふだのつけられた十字架に釘づけにされた。若き血潮が噴流する。イエスは今正に人生の真昼みそじどき、三十路みそじを過ぎたばかりである。」

本当に青年イエスですよ。一番充実した、人生の中でも30代というのは充実した時期ですから。その三十路を過ぎたばかりのイエスの姿がこれであった、ということをお池辰雄が簡単に書いてくれているけれども、これは小池の思いがでてきますよ。

「人間の、人類の、世界の、どうにもならぬ不信の」

と書いています。これは小池の思いがここに出ているのだらうと思います。



## ●このイエスをはりつけにした十字架

《このイエスをはりつけにした十字架がドカンという地響きをたてて、掘った深穴の中に打ち立てられた。イエスの十字架の両側に、二人の悪人が同じく十字架された。

イエスは十字架の痛苦の極みの中で、彼を磔刑に処した人々を恨むどころか、

「父よ、彼らを赦してやってください。わきまえもない彼らの仕打ちを！」（私訳）

彼らのこの仕打ちは言語道断のわざである。彼らとは我々人間である。人間はいくら諭されても、教えられても、根底から変化するものではない。現象面では百面相のような変化があっても、本質面ではなかなか変わるものではない。神の人イエスを十字架につけたということは、人間がそれほどまでに失われた存在、どうしようもないものだということの自証に他ならない。それ故人間の救われる道は唯一つしかない。すなわち十字架のイエスが、自ら、我々を「ゆるす」という本願を告げ給う一途だけである。それが今の十字架上のイエスの言であった。

万人は救を要する。ということは、万人はゆるされることを要する、ということをも根底としているということである。イエスの十字架上での「赦し」は、人間の決定的な罪、すなわち人間がこの罪、かの罪を犯したなどという罪過のことではなく、神に対する不信、反逆のあらわれとして、神の子を極刑、死罪に処したという人類史上有るまじき極みの不信、冒瀆の罪に関わる根本的な罪の赦しなのである。この決定的な罪の赦しは、神と神の子キリストの他にはできない。それ故、イエスが十字架上で父に祈ったこの罪の「赦し」こそ、本願の勅力をもっている。自らはつぐない得ぬ人間の罪をつぐなったイエスのこの「赦し」こそ贖罪の大愛である。敵を愛する愛の根底は、イエスのこの愛にある。おのれを敵とした敵に対して救をもたらしたこの事実、この現実。これが愛の極みである。我々の過去、現在、未来の罪過一切をゆるしておられる十字架のキリストの砕けそのものによって、我々の心は始めて砕かれる。人間の心一切の問題は、この十字架の贖罪の無条件的「ゆるし」を受けることによって、解決への道が拓かれてゆく。これを本当に身に受けた人は、人を「さばく」ことができなくなる。パリサイ根性がぬけてゆく。

人類の歴史を両断するこの「ゆるし」に圧倒され、キリストの大慈大悲に降参するとき、罪からの解放がその人に事実となる、現実となる、たましいの自由の境地が開示されてくる。《

ここの始めに、

イエスをはりつけにした十字架がドカンという地響きをたてて、掘った深穴の中に打ち立てられた。

と書いてあるでしょ。聖書にはそんなことはひとつも書いてない。これは小池辰雄の思い



ですよ。「ドカーン！」という物凄い大きな地響きを立てて十字架が立ったという、小池辰雄の思いがここに出ていると思う。聖書には、そんな「ドカーン」という音は全然しなかったと思う。こういう所の小池辰雄の思いが本当に私はわかるんですよ。こういう表現しかなしうがなかったというのが小池辰雄なんです。そのへんから私は、幼児みたいな人だなと思う。

「イエスは十字架の痛苦の極みの中で、彼を磔刑に処した人々を恨むどころか、

「父よ、彼らを赦してやってください。わきまえもない彼らの仕打ちを！」（私訳）

もう何にも人間はわかってないんですよ、ということですよ。それをイエスは本当に心からわかっている。根本から人間というのは、煮ても焼いてもどうしようもないんだということ。だから、父に向かって、

「彼らは何もわかってない。自分を十字架につけたという意味も全然わかってない。

だから、お父さん、彼らを赦してやってください。彼らは何もわかってないんですよ」

ということを言った。このゴルゴタの丘というのは、本当に声が聞こえるくらい近くでみな見ている。だから、この声が全部記録されている。今だったら、刑場というのは私たちの目から隠されているでしょ。どこで死刑が行われたのか全然わからない。でも、この当時はみんなに見せられるわけですから、その言葉が全部聞こえていたわけです。イエスの表情も全部わかっていたと思う。その近くで皆さんが見てたということですよ。

「父よ、彼らを赦してやってほしい」

というのは、本当に神さまの願いそのものを、人類にかける本願をそのままこの言葉にされた。彼らを赦してやってくださいということを言った。

「彼らの仕打ちは言語道断のわざである。彼らとは我々人間である。」

そうなんです。聖書を読んでも客観的です。何か映画を観ているみたいな感じですよ。ところが、その中に自分がいるということ。ここで小池辰雄はハッキリ言っている。「彼らとは我々人間である」と。「自分もその中に居るんですよ」ということを言っている。小池辰雄もその中に居るということ。ここで言っている。

「人間はいくら諭されても、教えられても、根底から変化するものではない。」

そうなんです。人間はいくら諭されても、教えられても——教育があるでしょ——教育で、

「ちゃんとしなさい。人を騙したらダメです、物を盗ったらダメです、人を殺したらダメです」

と、教育でみな聞いてます。けれども、

「人間はいくら諭されても、教えられても、根底から変化するものではない」

という。「根底」と書いてあるでしょ。これは「絶対変わらない」ということ。何をしても



変わらないということです。それが、

「根底から変化するものではない。現象面では百面相のよつな変化があっても、本質面ではなかなか変わるものではない。」

表面は、みな社会生活をするけれども、ちゃんとした挨拶もするし、服も着るし、ちゃんとした生活をしてます。けれども、何かあった場合は、根底は変わらないものだから、本当にこの十字架に付けた姿と一緒にすよということをやっている。

「現象面では百面相のよつな変化があっても、本質面では根底は絶対にならない。」

なかなか変わるものではない。

と書いてますけれども、私は「絶対に変わるものではない」と代えて読みます。小池辰雄もこれは「なかなか」というふうなことを言ってますけれども、これは「絶対に」という言葉の方がいいと思う。「根底から変化するものではない」と小池の前の文章があるように、ここは「本質面では絶対に変わるものではない」ということ。本当は小池もこういうふうに書きたかったけれども、何かこう書いてしまったんですね。

神の人イエスを十字架につけたということは、人間がそれほどもまでに失われた存在、どうしようもないものだということの自証に他ならない。

もう何遍も繰り返し繰り返し「どうしようもないんですよ」ということを、小池辰雄は言う。人間は「失われた存在」というのは、「神さまから失われた存在」という意味です。神さまから見捨てられた存在、どうしようもない存在だということの自証に他ならないと。

それ故人間の救われる道は唯一つしかない。

道はただ一つ、イエスの道はもう本当に一つしかない。それは、

すなわち十字架のイエスが、自ら、我々を「ゆるす」という本願を告げ給う一途だけである。

ここに「本願」という言葉が出てきます。これが、

「父よ、彼らを赦してください」

と、神さまにイエスが頼んでいる。これが本願ですよ。そういう

我々をゆるすという本願を告げ給う一途

もう本願で赦してやってほしいという、その本願が成立しなければ、我々はどうしようもないということをやっている。小池辰雄は言っている。

それが今の十字架上のイエスの言であった。

十字架の言葉の最後に、十字架に懸けられながら、神さまの本願をイエスは吐露している。「もう赦してやってください」という、これが神さまの本願ですよ。赦すというのが神さまの本願。もう本当に人間が神の子になることが本願です。光の子、神の子になることが本願なんです。それは、イエスのことがなければ成立しないということ、



「我々をゆるすという本願を告げ給う一途<sup>いっしょ</sup>だけである。それが今の十字架上のイエスの言であつた。」

という。この言葉が最高の言葉、神さまの本願の言葉なんですね。

「万人は救を要する。ということとは、万人はゆるされることを要する、

教会では「救われる、救われる」とよく言います。「救を要するということは、万人はゆるされることを要する」ということ。「赦し」ということが根本的ですよということを書いてある。「救われる」ということは、赦しがなかったら救われるということはないということです。

ということを根底としているということである。」

「根底」とか「根本」とか「本質」とか、こういう言葉を小池辰雄は言うでしょ。

「根底から変化するものでない。万人がゆるされるということを要するということ  
を根底としている」

とか。この「本質」ということを「根底」という言葉で小池は表現する。その次にも、「根本的な罪の赦し」と書いてありますでしょ。これは根底からゆるすということ。「この決定的な罪の赦し」という。これも「根本的な」という意味と同じですよ。だから、「根底から」とか「本質」とか「根本的」とか、言葉を変えてますけれども、本質、本当の根っこの根っこから罪の赦しというのがなかったら、我々はどうしようもないんだということ、こういう言葉を使うわけです。言葉を変えて重ねて、「根底」とか「決定的」とか「本質」とか、こういう言葉を小池辰雄は使つて表現してくれている。

これも、小池辰雄が自分が十字架で赦されたという、その喜びの思い、「もうこれしかない」ということで、こういう言葉が次から次へと出てくる。同じ言葉を使わないけれども、言葉としては違う言葉を使っていますけれども、もう言いたいことは、本当に「根本から、根底から」ということを言いたいわけです。

この決定的な罪の赦しは、神と神の子キリストの他にはできない。

それ以外の人はできない。もう罪のないイエスにしか「赦す」ということはできないということ、

神に対する不信「叛逆のあらわれ

これは「叛逆」と書いてありますけれども、本当に「敵」ということ。人間と神さまとは敵ということなんですよ。

それ故、イエスが十字架上で父に祈つたこの罪の「赦し」こそ、

十字架上でイエスは祈られるんですよ、「赦してやってほしい」ということを十字架上で言うわけでしょ。

この罪の「赦し」こそ、本願の<sup>たすけ</sup>力をもっている。

本願の力強い願いがそこにこもっている、本願の<sup>たすけ</sup>力をもっているということ。神さまの



本当の願い——「本願」の「本」は「もとの」という意味ですよ——根底の願いということ。根底の願いは凄い大きな力を持っていますよということをご自分で言っている。ちよつと読んだらわかりにくい。「本願の効力」をスルスルと読んでしまいますけれども、「根本的な神さまの本当の赦しの願いですよ」ということです。

自らはつぐない得ぬ人間の罪をつぐなつたイエスのこの「赦し」こそ贖罪の大愛である。自分では償い得ない。どんな罪も償い得ない。もう神さまに赦してもらおうしかない。

自らはつぐない得ぬ人間の罪をつぐなつたイエスのこの「赦し」こそ贖罪の大愛である。

敵を愛する愛の根底は、イエスのこの愛にある。

ここにも「根底」という言葉が出てきます。

おのれを敵とした敵に対して救をもたらしたこの事実、この現実。

これは「事実」なんです。決して思われた世界ではない。「ゆるす」ということは、キリストが十字架につけられたその現実があるということ。これは本当に歴史的に起こった事実ですよということを言っている。

仏教だったら、親鸞のあれなんかは観念的です。まず血を流すということもない。まだ仏教の言葉は思われた世界です。やはり仏教でも凄い人がおられて、靈的に感じたから、こう書いているけれども。このイエスの神さまは本当に現実として、我々の歴史的に起こったことで、この赦しというのが凄い赦しなんですよ、ということをご自分で言う。

これが愛の極みである。

本当に「ゆるす」ということが愛の極みである。

我々の過去、現在、未来の罪過一切をゆるしておられる

「過去・現在・未来」というのは、わかりやすいけれども、もう人生そのものですよ。我々の人生そのものをゆるしておられる

十字架のキリストの碎けそのものによって、

小池は、「十字架でイエスが碎かれた」という表現をします。だから、ここで

十字架のキリストの碎けそのものによって、我々の心は始めて碎かれる。

という。これは重要なことです。我々は碎けきれない。「根底からはどうしようもない」と書いてますでしょ。碎けきれないのが我々人間の姿なんです。だから、「十字架の碎けをもらつて」と小池は言うでしょ。我々は碎かれないから、碎かれてくださったイエスを受け入れるということ、碎けをもらつた、碎けを賜つた」という表現を小池はします。だから我々の心は初めて、十字架で碎かれるんだということです。碎けきれない十字架を、キリストが碎かれてくださったその碎けを我々は賜つたということなんです。

人間の心一切の問題は、この十字架の贖罪の無条件的「ゆるし」を受けるところによって、ここにも「無条件」という言葉が出ています。絶対無条件なんです。

この十字架の贖罪の無条件的「ゆるし」を受けるところによって、解決への道が拓かれ



てゆく。

これも「絶対無条件だ」という言葉を小池は使いました。何か条件を付けて赦されるのではない。これは無条件なんです。小池の今までのものを読んでいると、絶対無条件の赦しなんです。もう「ああだ、こうだ」という赦しではなく、条件は一切付いてない。人間であれば無条件に赦されているんだということです。

解決への道が拓かれてゆく。これを本当に身に受けた人は、

ここに「身に受けた人」とある。小池は身に受けている。自分は存在としてもうわかったから、

本当に身に受けた人は、人を「さばく」ことができなくなる。パリサイ根性がぬけてゆく。

本当に身に受けて欲しいというのが小池の願いです。「私のように本当に十字架を身をもつて受けとって欲しい」という。

これを本当に身に受けた人は、

自分のことですよ、本当に身に受けた小池辰雄は、

人を「さばく」ことができなくなった。パリサイ根性がぬけていった。

という、小池の告白です。本当に身に受けた私小池辰雄は、さばくことができなくなった。パリサイ根性が抜けていったというのが小池辰雄のことです。これは第三人称的に書いてますけれども、小池の思いです。

人類の歴史を両断するこの「ゆるし」に圧倒され、

ここに「人類の歴史を両断する」と書いてましょ。旧約から新約にころつと変わってしまった。もう旧約みたいに神さまの律法を自分の力でする必要はなくなった。

「もう信仰だけになってしまいました。キリストが全部なされたから、そのキリストを受けとるだけです」

ということが、「人類の歴史を両断した」ということ。だから、暦の上で「西暦」というのがここから始まったでしょ。小池は「私はこのゆるしに圧倒されたんですよ」と言う。

キリストの大慈大悲に降参するとき、

「圧倒されて、どうしようもない。もう降参するしかない」という思いです。自分のことを言っているんですよ、全部、小池は。キリストの大慈大悲に圧倒されて降参したから、解放されて、

罪からの解放がその人に事実となる、現実となる、

「その人に」と第三人称で書いてますけれども、小池辰雄は圧倒されて降参して、罪から解放された事実になってしまいました、ということをやっている。事実となりました、現実となりました。そして、小池は、

「たましいの自由の境地が開示されていきました」



と言っている。これは三人称で書いていたら、あなた方もそうですよというふうなニュアンスになりますけれども、これは小池辰雄が主語ですよ、ここでは全部。ここを読んでいくと、全部、小池辰雄が主語なんです。

「私はこの人類を両断するゆるしに圧倒されました。キリストの大慈大悲に降参しました。罪から解放されました。そして、私はそういう事実、現実として生きています。たましいの自由の境地が開示されました」

というのが、小池辰雄の本当の告白なんです。これは本ですから、一応、第三人称的に書いてますけれども、決してこれは小池は第三人称的に言っているのではないということです。

### ●多くの人は法律的犯罪者ではない

《多くの人は法律的犯罪者ではない。然し、その可能性は万人がもっており、宗教的には万人は罪びとである。「罪の価は死なり」で、宗教的には、万人はこの死刑囚とかわりがない。そのことはキリストの「山上の垂訓」の言にあきらかである。さればこそ、この罪を贖うために、キリストは、聖意を体して自らを十字架にかけられるままになさったわけである。だから、イエスは「われは自ら棄てるのだ」と言ったのである。罪なきイエスは、霊化して、いきなり天界に昇ることができたのであるが、ゲッセマネの祈りにおいて、贖罪の大義・大愛・神義・神愛を無条件に体受し給って、

「わが意志に非ず、汝の意志を〔この身を貫いて〕成就し給え」

と挺身の祈りをなして、十字架への道を決然として執り給ったのである。

十字架上の二人の悪人は、贖罪愛の十字架のイエスを、右にまた左に目のあたり見ながら、一方の男はこれを拒み、他方の男はこの前に平伏している。》

ここで、

多くの人は法律的には犯罪者ではない。

とある。我々は決して犯罪者ではないですよ。まあ、赤信号を無視することくらいはやっているでしょうけれども、それ以外はやってません。盗みをしたり、人を傷つけたり、そんなことはしてないですよ、我々は。日常生活ではちゃんと生きてます。だから、法律的には犯罪者ではありませんけれども、ここで、「法律的犯罪者」に対して、「宗教的な犯罪者」が対立している。「犯罪」ということが、法律的と宗教的と対立している。我々の日常生活では、法律的には絶対に犯罪者ではありえない。ところが、「宗教的には」ということでですよ。だから、「法律」と「宗教」は対立している。「現世」と「かの世」というように対立していて、我々の日常生活では

「法律的には決して犯罪者ではないけれども、宗教的には万人は犯罪者である」ということです。



「罪の価は死なり」で、宗教的には、万人はこの死刑囚とかわりがない。

と。これは、十字架でも、旧約のときでも、現実の我々の生活と、それから宗教的なものがゴチャゴチャになってしまっている。たとえば、旧約聖書にいろいろ出てきますけれども、あれを科学の書として見るような見方がある、「あれは間違っている」とか言う。あれはどこまでも宗教的な信仰の書なんです。新約聖書も信仰の書です。だから、なかなか「十字架の贖い」とか、「赦し」とかいうのは世の中の人に理解してもらえない。我々はどうしてここにおりますから、靈的に知らされて、宗教的なことがわかるから、

宗教的には万人は死刑囚とかわりがない。

ということをお池辰雄は言うわけです。現実の社会では、我々は絶対にそんな犯罪者ではない。犯罪者になったら大変ですね、後ろ指を指されますしね。そういうことではない。これはどこまでも「宗教的に罪びとなんですよ」ということを言っている。だから、これはなかなか世間の人にはわかってもらえない。

「私は全然、罪なんか犯したことはない」

とみんな言いますよね。初めて教会に行った人が、

「あなたは罪びとだ」

と言われたらしい。それで家に帰って、家族の人に「我々は罪びとなんだ」とか言う。そういう表面的なことではない。靈的に啓示されて初めて、「宗教的」という意味がわかってくる。小池辰雄は十字架を受けとったから、

宗教的に万人は死刑囚とかわりがない。

ということをはっきりと言うことができる。ところが、靈的なものを受け入れなかったら、「十字架」というのはなかなかわからない。ここに居る方はわかったとしても、一歩外へ出たら、その十字架の意味なんか絶対にはわからない

「なんで十字架なんかキリスト教会には立っているのか？」

くらいですよ。私自身も長いことわからなかったけれども、初めてこの十字架を受けとったときに、「宗教的には我々は全員が死刑囚なんですよ」ということがわかった。

この罪を贖うために、キリストは、聖意を体して自らを十字架にかけられるままたまにさったわけである。

キリストほど、父・神さまの願いを体で現した方はおられない。だからここに、「聖意を体して」と書いてあるでしょ。「聖意」というのは神さまの願いです。本当に

「神の子にしてやろう、光の子にしてやろう、永遠の生命を与えてやろう」

というのが、神さまの本願、聖意であって、その神さまの聖意を体で受けとっておられて、みづか「自ら十字架にかかられた」ということを言っている。

だから、イエスは「われは自ら棄てるのだ」と言ったのである。

みんなから十字架につけられたけれども、イエスは自らあの中に入って行った。十字架に



つけられることを自らやはり願われた。人から棄てられたけれども、自分もまたそういうふうな十字架にかかってもいいんだというような願いは持つておられた。

だから、イエスは「われは自ら棄てるのだ」と言っただのである。罪なきイエスは、靈化して、いきなり天界に昇ることができたのであるが、

これが「エクソドス」です。本当に靈化されたキリストの姿がありましたよね、顔が輝いて、旧約の預言者が出てきたりしたでしょ。ああいう記事がちゃんと残っているということは本当に、

罪なきイエスは、

死を体験しなくて、

靈化して、いきなり天界に昇ることができた。

そういう人なんです。あの「エクソドス」のところで「そのまま天界に行かれてもよかった」ということを小池辰雄は言う。ところが、十字架という道を通らなければ人類には救いはないんだということだ、

「罪なきイエスは靈化していきなり天界にのぼることができたのであるけれども、

やはり十字架の死を体験しなければ、我々には希望も何もなくなっただけだ、

と。だから、

贖罪の大義・大愛・神義・神愛を無条件に体受し給ったのだ。

と。神さまの意志を受けとって、

「わが意志に非ず、汝の意志を〔この身を貫いて〕成就し給え」

という祈りになった。あの「エクソドス」のところで本当に靈化してそのまま天国に行かれてもよかったんだ、ということをやった。ところが、やはりゲッセマネの祈りにおいて、「自分の意志ではなく、お父さまの意志に従って私のこの身を貫いて成就したまえ」という祈りが十字架になっていったということなんです。

「わが意志に非ず、汝の意志を〔この身を貫いて〕成就し給え」

と挺身の祈りをなして、十字架への道を決然として執り給ったのである。

ということなんです。あのゲッセマネの祈りで「血の出るような汗を流された」というのがありますように、凄いい祈りだったと思う。私らはイエスの気持ちなんて想像さえできません。

そしてその次に、二人の罪人の話が出てくる。

十字架上の二人の悪人は、贖罪愛の十字架のイエスを、右にまた左に目のあたり見ながら、一方の男はこれを拒み、他方の男はこの前に平伏している。

ということだ、両方の罪びとのお話が出てきます。

●一方の悪人はイエスを罵って

「一方の悪人はイエスを罵って、ふてくされた言葉を吐いた。他方の悪人は今度はイ



エスに向って、

「み国にお入りになるとき、「せめても」私を憶えてください」

と（現行訳は「御国の権威をもっておいでになるときに」とある）、心情を吐露して願った。人間の交りの世界でも、いつまでも友人に憶えられているということは、大きな慰めである。況してや、神の子キリストに憶えていただくことは、この悪人にとって、存在的な救いにあずかることである。神を畏れる砕けの心から滲み出た悪人の平伏しの悲願は、イエスの本願の心の緒琴の琴線に深く触れたのである。この悲願に対して、イエスの本願はなんとひびき出たか。

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒に、お前はパラダイスだ！」（私訳）

これほどなくさめ深い、情け深い、どん底の思い遣りの、抱きかかえの、白熱の愛の言葉があるうか。私には正直なところ、これがイエスの言の中の最愛の言である。私の全存在はこの言に荷<sup>にな</sup>われている。抱<sup>いだ</sup>かれている。私は愛に飢え渴いている男だ。力あるイエスの愛。決して棄てない愛、うらぎらない愛。生命を与え、歓喜をみなぎらせ、光で包み、愛泉を湧き出させ、大慈悲心をわがうちに起こさせ、大乗的に生かしめるイエスの愛！ 私はこの愛で生きている。呼吸している。今日も、明日も、次の日も。地上にある限り、毎日毎日がイエスと共にパラダイスなのである。しかし私は人間だ、私は弱い。時折ぶつ倒れたくなる。その時イエスの足もとに。彼は抱き、ふところに入れてくださる。その時キリストと私は一つだ。パラダイスだ！

「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」

これが私の根源現実である。きよいのきよくないの、義しいの義しくないの、そんな品さだめの世界は私の存知せぬものだ。イエスは私の万斛<sup>ばんかく</sup>の涙を御存知だ。それだけでいいのだ。》

小池辰雄の衷心の吐露ですね。一方の悪人が心砕けて、

「み国にお入りになるとき、せめても私を憶えてください」

と言った。それを周りの人たちには聞こえていたから、ここに残っているわけです。これは人類の悲願ですよ。神さまの子になる——みんなは気がついてないだけで——光の子になるというのは、本当は人間の悲願なんです。永遠に生きたい、死にたくない。本当に「永遠の生命」があるのだしたら、そういうものにしてほしいというのが人間の本来の願いだと思う。ところが、大部分の人たちは「神さまはいない」と思っている。特に日本人は思っていないから、悲願ということがわからない。けれども、悲願というのは人間の願いですから、本当に永遠に生きたいというのが、一方の悪人と同じように、本当は神さまに憶えていてほしい。これは極限状態になつてからこういう言葉が出てくるけれども、我々は極限状態にないから、日頃はあまりそういうことは考えない。ところが、「せめても私を憶えてください」という、この砕けた悪人の気持ち<sup>こころ</sup>が本当の悲願として、代表として言



つてくれている。この一方の悪人が我々を代弁してくれている。「この悪人と私とは関係がない」と思ったら、とんでもない。我々はこの悪人のような極限状態に置かれたら、この悪人と同じような立場になっていく。我々はそういう極限な所には追い込まれていないからわからないだけの話で、こんなふうに極端な所に追い込まれると、こういう悲願が絶対わいてくる。それを代表してこの悪人が言ってくれている。

神を畏れる砕けの心から滲み出た悪人の平伏しの悲願は、イエスの本願の心の緒おじと琴の  
琴線に深く触れた。

と書いてあるでしょ。人間の思いを神さまのほうのがはたと受けとつて、「本願をお前の上に成就しますよ」というのが、この悪人とイエスとの会話なんです。ましてや、神の子に憶えていただいたら、それほど嬉しいことはない。人に憶えられることも嬉しいけれども、それ以上に神の子に憶えていただくことほど嬉しいことはないということを小池辰雄は言うわけです。この十字架の所で、人間の悲願、人間の心からの願いをイエスは十字架の所ではたと受けとられたということなんです。イエスの本願がここで成就した。これは本当に我々一人ひとりなんです。それを小池辰雄はこの記事を見て、

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒に、お前はパラダイスだ！」  
という言葉を、

これほどなぐさめ深い、情け深い、どん底の思い遣りの、抱きかかえの、白熱の愛の  
言葉があるとか。

と重ねて言っている。「なぐさめ深い、情け深い、どん底の思い遣りの、抱きかかえの、白熱の愛」と、これだけ言葉をどれほど尽くしても尽くしきれないほど、

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒に、お前はパラダイスだ！」

という言葉を——この悪人が受けとつたのではない——小池辰雄が受けとつたんです。

これほどなぐさめ深い、情け深い、どん底の思い遣りの、抱きかかえの、白熱の愛の  
言葉があるとか。

と、繰り返し繰り返し言葉を重ねている。「こんな凄い愛があるだろうか、白熱の愛があるだろうか」ということをここで言う。

私には正直なところ、これがイエスの言の中の最愛の言である。

と言っているでしょ。小池辰雄はここでもう本当にこれを最愛の言として聖書の中から受けとつたんです。

私の全存在はこの言に荷われている。抱かれている。

この言葉は小池辰雄にとつては、赤ちゃんが母親に抱かれていると同じような表現なんです。「この言に荷われている。抱かれている」と言う。

私は愛に飢え渴いている男だ。

ここで私は初めてこの言葉に小池辰雄の心情（真情）がわかりました。「私は愛に飢え渴い



ている男だ」と。人間の生活の中でも、恋人の愛とか、親子の愛とかあるでしょ、兄弟愛とかいろんな愛があります。師弟愛とかいろんな愛があるけれども。その愛ではなくて、この「愛に渴いている」という意味は、十字架を小池が受けとられてから、

「神さまの愛がなかったら生きられない」ということの反語なんです。

「私は神さまの愛に飢え渴いている男だから、十字架がなかったらどうしようもない」とい

ということが、私は今回これを読んでいて、

「あつ、小池辰雄は本当に孤独だったんだな」

と思いましたよ。いくら家族の愛があつたとしても、やはり神さまの愛がなかったら、もう本当にどうしようもないから、この「飢え渴いている」というのは、「神さまの愛に飢え渴いている」という意味だと私は思いました。

力あるイエスの愛。決して棄てない愛、うらぎらない愛。生命を与え、歓喜をみなぎらせ、光で包み、愛泉を湧き出させ、大慈悲心をわがうちに起こさせ、大乗的に生か

しめるイエスの愛！

これも何回も繰り返して表現を変えて言っている。

私の全存在はこの言に荷われている。抱かれている。私は愛に飢え渴いている男だ。力あるイエスの愛。

イエスの愛こそ本当に力があるんですよ。親の愛も力があるかも知れないけれども、そんな力どころではない。本当に力が漲る愛のことを言っている。

決して棄てない愛、うらぎらない愛。生命を与え、歓喜をみなぎらせ、光で包み、愛泉を湧き出させ、大慈悲心をわがうちに起こさせ、大乗的に生かすイエスの愛！

何回読んでも、小池辰雄の思いがここに吐露されている。

なぐさめ深い、情け深い、どん底の思い遣りの、抱きかかえの、白熱の愛という、本当に母親に抱きかかえられているような愛なんです。だから、「この言葉の中に私は幸いの言葉を見る」ということですよ。

私の全存在はこの言に荷われている。抱かれている。力あるイエスの愛。決して棄てない愛、うらぎらない愛。生命を与え、歓喜をみなぎらせ、光で包み、

本当に「棄てない愛だ」ということを言っている。この最後の数行は、小池辰雄の十字架を受けとったときの思いですよ。これをこれだけ言っているけれども、これがなかなか伝わっていない。我々にも伝わっていません。私はここを読んでみると、

「ああ、小池辰雄は本当に神さまの愛に飢え渴いていたんだな」

と思います。だから、このキリストの愛こそは本当に凄い愛で毎日毎日、

私はこの愛で生きている。呼吸している。



こんな表現をしますか、普通。生きていますだけです。だけど、

「私は一回一回の呼吸はイエスによってなされているんですよ」

ということを行っている。

私はこの愛で生きている。呼吸している。今日も、明日も、次の日も。地上にある限り、

毎日毎日がイエスと共に。パラダイスなのである。

もうずうつと死ぬまで、

「私はこの地上にある限り、毎日毎日一秒一秒ごとイエスと共にパラダイスにある

んだ」

ということを行っている。

私は最近思うんです。朝起きてから私は嬉しいんですよ。本当に嬉しい。私は小池辰雄ほど表現能力はないけれども、本当にこの「呼吸している」という言葉が、「生きている」という言葉よりも、「呼吸している」ということ。脈搏とか呼吸とかを意識しなくても、ここでは「生きている、呼吸している」ということを小池辰雄は言う。本当に十字架を受けつつ喜びがここに表れている。「うれしい、うれしい」なんて言わない。決してそういうことは言わないけれども、

「決して棄てない愛、決して裏切らない愛、本当に生命を与えてやまない、歡喜を漲らせてやまない、光で包んでやまない、愛泉を湧き出させて、本当に自分の心から愛情が溢れてどうしようもないんだ」

というようなことをここで小池辰雄は言ってくれている。

私はこの愛で生きている。呼吸している。今日も、明日も、次の日も。地上にある限り、毎日毎日がイエスと共に。パラダイスなのである。

という、この悪人に語られたイエスのこの言葉を最愛の言葉として生きておられたんですね、小池辰雄は。そして次の頁に、

しかし私は人間だ、私は弱い。時折ぶつ倒れなくなる。その時イエスの足もとに。彼は抱き、ふとこころに入れてくださる。

母親が子どもを抱いているのと同じように——靈的にですよ——彼は私を抱いて、ふとこころに入れてくださって、キリストと私は一つになった。それがパラダイスだと言っている。

その時キリストと私は一つだ。パラダイスだ！

「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」

これが私の根源現実である。

生きている限り、そういうところまで行きませんよ。

「キリストがわがうちに生きている」

とパウロは言いましたが、それでもパウロは

「完成しているとはちつとも思っていない」



と言っているでしょ。それと同じように、この地上に生きている限りは、100%キリストと一緒に成れない。だけど、根源の神さまの側では、これは本当に現実になっている。それが、これが私の根源現実である。

「神さまの側ではちゃんともう成っているんだから、何も心配は要らない」と。この地上に生きていく間はやはり不完全ですよ。パウロでも不完全だと言っているから、我々もましてや不完全なんです。けれども、

「十字架というものが宗教的にも確立されたのだから、我々は本当に心配は要らない。あちらの側ではお前はもう受けとった。もうあちらの側ではお前は絶対に棄てないんだ」

というような意味ですよ。ここに「棄てない愛」と書いてあるでしょ。

決して棄てない愛、裏切らない愛。生命を与え、本当に歓喜を漲らせる。

と書いているように、そういう根源現実では本当にそういうことなんですよということですよ。だから、

きよいのきよくないの、義しいの義しくないの、そんな品々だめの世界は私の存知せぬものだ。

そんなことを私に言われても、そんなものは私の知らないことだ。勝手に言っていたらいいよ、そんなものはと。

イエスは私の万斛の涙を御存知だ。それだけでいいのだ。

と。人に理解されようが、理解されまいが、そんなことはどうでもいい。

「神さまとイエスと私があれば、もうそれだけでいいんだ」

ということを言っている。

小池が何かやはり孤独な感じを受けることもあるんでしょうね。人に理解されないとかがあるんだと思う。だけれど、

「イエスだけは私の本当に心からの涙を御存知だから、もうイエスに知ってもらっただけでいい」

ということを言っている。これも小池の告白です。

「キリストがあればそれだけでいいのだ、もう他のものは要らない」ということをここで言ってくれている。

### ●私が死んだら十字架の木の柱を立てて

《私が死んだら、十字架の木の柱を立てて、このキリストの一言を墨書してもらいたい。その十字架は雨露に曝されながら、枯木の如く龍吟して、

「旅人よ、友よ、キリストの大愛に生きよ。パラダイスで待っているよ。」



とささやくであろう。

噫、この悪人に告げ給いし十字架のイエスの一言。何たる福音か。マイナス九九でもあったであろう彼は、生涯の最後の瞬間に砕けのーに立ち帰った。イエスはこの小さな芥種一粒の信をハタと受けとめ、そこに彼の全人的なひびきを見て、無条件、全的に福音の言を投げ、彼を全的に包み、抱いて、天に昇せてしまった。》

この悪人に告げたイエスの言葉、

「今日、お前は私と一緒にパラダイスだ」

という言葉、これこそ本当に最高の福音の言葉だ、「何たる福音か」と書いている。これ恵みの最たる福音だということを書いている。これ以上の福音の言葉はないんだということ、この言葉こそ最高の福音の言葉だ」という意味です。

マイナス九九でもあったであろう彼は、生涯の最後の瞬間に砕けのーに立ち帰った。最後の瞬間に砕けて神さまに立ち返ったと。

イエスはこの小さな芥種一粒の信をハタと受けとめ、

本当に小さな「芥種一粒の信」ですよね。本当に小さい小さい信であるけれども、キリストのほうはそれを十分わかっけていて、それをハタと受けとめてくださるということ、そこに彼の全人的なひびきを見て、

この悪人はもう本当にどうしようもない。十字架にかけられて死ぬ瞬間ですから、もう何の願いもない。ただ「キリストに愛される」という願いだけがあつたんでしょね。だから、これは全存在からキリストに語りかけた。「そこに彼の全人的なひびきを見て」、たった一つの小さな信、芥子種ほどの小さな信ですけれども、

そこに彼の全人的なひびきを見て、無条件、全的に福音の言を投げ、彼を全的に包み、抱いて、天に昇せてしまった。

と書いてある。小池辰雄の言うことは、

「無条件、全的に福音の言を投げ、彼を全的に包み、全的に抱いて、天に昇せてしまった」

ということ。同じことを繰り返し繰り返し小池は言葉を変えて言っている。「無条件、全的に包み」とか、これは本当に小池辰雄の体験そのままを言っているんだろうと思います。

《人間の善悪が何だ。

「我らの義はごとごとく汚れたる衣の如し」

とイザヤも言っているではないか。潔・不潔、義・不義ときめつけ、品定めする。パリサイ根性をキリストは斥けた。イエスは全的に自分をぶちまけて、あるがままで向つてくる在り方、イエスの前に降参し、イエスのふところに投身し、全托する全人的な在り方を無条件に受け入れ給つ。



まことに、イエスと共に、いの一番に、天国に入った者は、一方の十字架の悪人であった。福音を端的に語る事実として、これ以上の劇的なものがあるのか。キリストなる哉、イエスなる哉、福音なる哉。

この十字架上の悪人往生の事態に照合する言を東方の親鸞が吐露しているではないか。

「みだ弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益りやくにあずけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少善悪のひとをゑらばれず。ただ信心を要とすとするべし。そのゆへは、罪悪深重しんじゆう、煩惱熾盛ぼんのうしじょうの衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆへに。悪をもおそるべからず弥陀の本願をさまたぐる程の悪なきがゆへにと。」（『歎異抄』）

ここに親鸞の言葉が出てきてますが、その前にやはり小池の、イエスは全的に自分をぶちまけて、あるがままで向ってくる在り方、イエスの前に降参し、イエスのふところに投身し、全托する全人的な在り方を無条件に受け入れ給う。

これはさつきから繰り返し繰り返し言っていることです。  
「無条件である、全的である、ぶちまける、あるがまま」

とか。赤ちゃんがあるがままに母親にいだかれてるように、あるがままに向かってくる、そういう在り方をイエスは非常によしとされる。子どものように、赤ん坊のように、母親に降参するように——「降参する」という意識もないですよ、子どもというのは——本当に抱かれるのが当たり前だと思ってるでしょ、赤ちゃんというのは。そういう思いさえない。そこまで我々をイエスは十字架で成してくださった。それを言葉で表したら、  
「全的に自分をぶちまけて、あるがままの姿で全托する全人的な在り方を無条件に受け入れ給う」

と。小池辰雄の言葉は全部そうでしょ、「全的に」とか、「全托」とか、「全人格的に」とか、「無条件」とか、こういうふうな言葉で。普通の人間の判断がありますよね、「清い、清くない」とか、「正しい、正しくない」とか、これは人間の判断です。

「そんなことはもう全然関係ない、そんな品定めをすることはしない」  
と。私たちは社会生活をしているから、ついつい品定めをして生活してましますけれども、「そういうパリサイ根性はもう抜けていった」ということです。そういうことを退けて、

「イエスは、本当に自分を全的にぶちまけて、あるがままに向かってくる在り方をよしとされる」

ということをここで言っている。

まことに、イエスと共に、いの一ばんに、天国に入った者は、一方の十字架の悪人であ

った。

「いの一番」ですよ。全人類の中から、世界にいる多くの人類から、「いの一番に天国に入ったのはこの一方の悪人だった」ということです。それを小池は受けとって、「ああ、自分もそうなんだ」ということを言っている。

福音を端的に語る事実として、これ以上の劇的なものがあるうか。キリストなる哉、  
イエスなる哉、福音なる哉。

「これほど素晴らしいことはない。本当にこの事実こそ福音を端的に表す事実です」ということを言っている。

これ以上の劇的なものがあるうか。キリストなる哉、イエスなる哉、福音なる哉。  
と。「これほど素晴らしい福音はありません」ということをここで言っている。

親鸞の『歎異抄』が引用されています。ここで、

「弥陀の本願をさまざま大づる程の悪なきがゆへにと」

と書いてある。「キリストの愛に、妨げるような悪というものは絶対に存在しない」ということです。「どんな悪でも赦される」ということを言っている。親鸞という人は凄い人ですね。「弥陀の本願」とは神さまの願いでしょ。

「神さまの願いをさまざま大づる程の悪なきがゆえに」

という。神さまの愛に勝つような悪なんてないのだから、「ただ信心だけを要する」ということをこの親鸞が言ってくれている。

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて」

もう神さまの国にされるといふことを信じて、神さまに全部委ねたら、そういうふうな心が起こったら、もう絶対に棄てられることはないというのが、

「攝取不捨の利益にあずけしめたまふ」

ということ。弥陀の本願には、神さまの願いには、老いも若きも、悪も善きも、選択することは絶対がない、「あなたはだめだ」というようなことは絶対がない。弥陀のほうは、神さまのほうは「あなたは絶対だめだ」というようなことは絶対がないのだから、ただもう本当に信じたらいんだよということ言っている。

「罪悪深重、煩惱熾盛の衆生を」

我々はそういう人間です。それを助けようとしたのが神さまの願いです。だから、キリストを信じたなら——他に何か我々がするようなことがあるかという——「他の善も要りませんよ」と言っている。「神さまに全部委ねたら他に何も付け足すことはない」と。

「他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに」

と。信心すること以外に善いことはないんですよ、ということですよ。

今日の讚美歌(332)もそうでした。

「われ何をなして主にむくいし……われは主のために何をすてし」



と。「こんなことはできない」ということでしょ。

「我々は為すことはない。ただ本当に神さまを、十字架を受けとることだけですよ」ということを、この『歎異鈔』でも同じことを言っている。

ただ復活のことなんかは全然出てこない。ただ「死んだら迎えられる」とかいうことだけです。キリスト教には復活までありますから、本当に復活して神さまと同じ姿に変えられるというのは将来のことです。だから、それを「見ずして信ずるのが信仰だ」と言っているでしょ。

ここに引用された『歎異鈔』の言葉は、小池辰雄がやはりここに触発されて、十字架のありがたさをここに書いてくれた。『歎異鈔』のこの短い中に凄いことが入っている。

### ●ゴルゴタの十字架を見おろしていた天

『ゴルゴタの十字架を見おろしていた天は暗澹あんたんとしてきた。昼の十二時というのに、暗雲全天を蔽い、天地晦冥かいめいである。かくて午後の三時に及んだ。イエスの血は滴りしたたつづけ、生命の限界に達した。そのときイエスは叫んだ。

「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」

（神よ、神よ、何で私をお棄てになった）（私訳）

地のすべての者に棄てられ、ついに神にすら棄てられた天涯孤独の叫びは独語ではない。絶対に信頼し抜いた神への叫びである。それゆえに、これは信頼の極限の叫びである。そしてこれは、聖意を体現し、神を義とし奉って貫いた彼の在り方、神とキリストとの義の関係、実に天地を貫く神の義が立つか倒れるかの叫びであった。神の義——神意体現——の事態が無視されてなるものかの抗議。イエスのこの叫びあつてこそ「ゆるし」なのである。神の義と神の愛は、正に十字架の縦棒（義）と横棒（愛）のクロスしている組合わせが象徴している。キリストの義は、人を審く義ではなく、与える義として愛に転ずる。義が砕かれて愛となつている。単なる痛みではなく、砕けて愛に溶ける。矛盾を渾然こんぜんたる義愛一如となしている。それを贖罪愛という。

この神の義体現の叫びのあとで、イエスは絶叫した。誰もその絶叫の意味を知らない。それは高次の異言であった。霊言そのものであった。さればこの絶叫がエルサレムの天地に響くや、神殿の聖所と至聖所の間の幕が真二つに裂けてしまった。これは旧約宗教の突破とその成就を宣言する徴であった。自ら大祭司となり、自ら屠ほふられた羔こひつてとなつたイエスは、旧約の、イザヤ書第五三章の預言を絶頂とする贖罪の宗教を全うしたのである。

その後で、

「父よ、私の霊をみ手におゆだねします」

と投げ身の祈りをなされた。大往生の平安の響きであった。この情景を終始監視して



いたローマの百卒長もついに感嘆のあまり告白した。

「本当にこの人は神の子であった」

これらの凄惨な情景を、畏れと悲しみの中で、涙ながらに、遠くまた近くに看まもっていたのは、ガリラヤの方面からはるばる従ってきた女達であった。母マリヤとマグダラのマリヤは特に十字架の近くに待っていた。母マリヤの胸は、シメオンの預言の如く、剣で貫かれるおもいであつたろう。深い魂の傷をいやされたマグダラのマリヤの心は十字架の主にとりすがっていたのであろう。その心境をロダンが大胆に彫刻で表現している。》

最後のところでは、

「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」

（「神よ、神よ、何で私をお棄てになった」）

これはイエスが代表して言ってくださっている。我々は棄てられている人間なんです。十字架がなかったら。これは代表してイエスが言ってくださった。我々の罪のためにイエスが十字架にかかられたということは、我々はこのまま十字架がなかったら、棄てられた存在なんです。だから、代表して、

「神よ、神よ、何で私をお棄てになった」

と。こういうことは、十字架を受けとる前はわからない。イエスだけが天涯孤独だということですけども、我々が神から棄てられている存在なんですよ、十字架がなかったら。そういうことをイエスが代表して言ってくださったんだとちがうかなと、私は理解している。

絶対に信頼し抜いた神への叫びである。

と。けれども、本当に我々の罪びととしては、そこにかかられたから、我々は棄てられても当然な人間なんです。それをイエスは言ってくださったんだなと私は思います。我々は本当に神に棄てられる存在にすぎない。それをイエスが十字架にかかって、棄てられない存在に変えられていった。だから、

「今日、私と一緒にパラダイスにお前は居るんだよ」

ということを仰ってくださいました。ここに「義の叫び」と書いてある。

これは信頼の極限の叫び

信頼ぬいた神への叫びがこの言葉だったということなんです。

神とキリストとの義の関係、実に天地を貫く神の義が立つか倒れるかの叫びであった。最後に、

「父よ、私の霊をみ手におゆだねします」

と言って、イエスは父の懐に入っていきます。

神の義の事態が無視されてなるものかという抗議



の叫びであると小池が言っている。

イエスのこの叫びあつてこそ「ゆるし」なのである。……与える義として愛に転ずる。義が砕かれて愛となっている。

と。しかし、ここに

イエスは絶叫した。誰もその絶叫の意味を知らない。

と書いてある。本当にキリストの言葉なんて全然、我々にはわからないという意味です。本当に我々にはわからない。キリストの本願の深い深いその愛のところまで、我々はともわからないことはできない。ただ本当に十字架をありがたく受けとる以外には方法はない。だから、さつき引用されたように、

「弥陀の念仏以外の他の善は要らない。念仏にまさるべき善はないゆえに」と言うように、

「信仰だけでOKなんですよ」

ということのパウロも言ってますでしょ。「信仰、信仰」と言っているでしょ。けれども、「信仰、信仰」と言ってる表面的に受けとるのではない。小池辰雄がこれだけ体験したことを詳しく吐露してくれているから、これが本当の信仰の前提になるところです。

今日のこの「ゴルゴタ」というところは、本当に小池の体験した十字架の神髄みたいなものを吐露してくれているところでした。それが今回学んだことでした。ということと終わりたいと思います。

